

# アウグスティヌス『告白』11巻における 時間の計測の問題

——セクストス・エンペイリコスの議論との比較から——

---

山田 庄太郎

## 1 目 的

本稿の目的は、2世紀末から3世紀初頭に活躍したギリシアの懐疑主義者セクストス・エンペイリコス（以下セクストス）の議論との比較を通し、『告白』11巻におけるアウグスティヌスの時間論の独自性を明らかにすることにある。但しこの比較の試みは、前者が後者に対し何らかの影響を与えたということを示唆する為のものではなく、むしろギリシアの懐疑主義者による時間に対する議論が『告白』11巻の議論の解釈に対し何らかの新たな光を投げかけてくれることを企図したものである。

1928年E. フッサールが、歴史上最初に内的な意識の問題として時間の分析に取り組んだ思想家という栄誉をアウグスティヌスに与えて以来<sup>1)</sup>、「それでは時間とは何か<sup>2)</sup>」という問いかけから始まる『告白』の一連の議論は、現代の時間論を担う現象学者らの注目を集めてきた。しかしその一方で、アウグスティヌスの中に過度に現象学的な視点を持ち込むことに対する批判もある。

これまでの『告白』の時間論に関する研究は、大きく二つの異なるベクトルの下に捉えられるように思われる。即ち、アウグスティヌスの議論の中に時間の本質に対する問いを見ようとする立場と、『告白』11巻

---

1) E. フッサール『内的意識の現象学』立松弘孝訳、みすず書房、1967年、9頁。

2) *Conf.*, 11, 14, 17; 底本として BA13-14, *Œuvres de Saint Augustin; Les Confessions*, texte M. Skutella, intr. et notes A. Solignac, trad. E. Tréhorel et G. Bouissou (Desclée de Brouwer, Paris, 1962) を使用。併せて Augustine, *Confessions*, I-III, ed. J. J. O'Donnell (Clarendon Press, Oxford, 1992) を参照。

の時間論を同書の構成や著作意図の中に位置づけ理解しようとする立場とである。

前者の中には先述したような現象学の立場からの研究が含まれる。また我々はベーリンガーやランペイらの名を挙げる事が出来るだろう<sup>3)</sup>。両者は、『告白』の時間論の中に、現存在者の時間性と、時間の瞬間性の中での時間性からの脱出、そしてその帰結としての神の永遠の現在との出会いを見てとる。ここにおいて時間は、現存在者の主体性との関連から捉えられている。また現存在者が永遠性を捉える場として、記憶の働きを明らかにした H. J. カイザーの研究も<sup>4)</sup>、この現存在者の内の内的統一をアウグスティヌスの時間論の内に見出そうとする限りで、本質的に現象学の立場からは異なっていないと言える<sup>5)</sup>。時間の本質に対するこれらの研究は一定の成果を挙げたが、その一方で彼の時間論が『告白』の中で論じられねばならない必然性については課題を残した。

第二の方向性は、マイエリンの名を挙げることによって説明される。彼はその詳細な注釈を通し、アウグスティヌス自身の文脈に『告白』の記述を再度位置づけることで、その「時間論」を時間それ自体についての理論と見るよりも、むしろ人間論として見ることを提唱した<sup>6)</sup>。彼の貢献は、時間論が独立した議論であるのではなく、アウグスティヌスの思索全体の中で捉えられるべき問題であるということを再び我々に想起させたことにある。

マイエリンの研究は従来の研究史に一石を投じるものであり、爾後この新たな方向性の下、『告白』の時間論をアウグスティヌスが置かれた歴史的、思想史的背景から捉えようとする試みが登場する。古代ギリシア以来の時間論の伝統の中にアウグスティヌスを位置づけようとする近

3) R. Berlinger, "Zeit und Zeitlichkeit bei A. Augustinus," *Zeitschrift für philosophische Forschung* 7, 1953. Erich Lampey, *Das Zeitproblem nach den Bekenntnissen Augustins*, Regensburg, 1960. なお 1950 年代から 80 年代初頭までのドイツにおける研究史は小阪康治「最近のドイツ語圏におけるアウグスティヌスの時間研究について」(『フィロソフィア』71, 103-120 頁, 1983) を参照。

4) H. J. Kaiser, *Augustinus: Zeit und Memoria*, Bonn, 1969. (H. J. カイザー『アウグスティヌス 時間と記憶』小阪康治訳, 新地書房, 1990 年)

5) 既にフッサールが彼らの辿るべき道筋を示している(フッサール, 上掲書, 120-125 頁)。

6) E. P. Meijering, *Augustin über Schöpfung: Ewigkeit und Zeit*, Brill, Leiden, 1979.

年のK. フラッシュの研究などはこの方向性の下に捉えることが出来よう<sup>7)</sup>。しかし彼は現象学的解釈に対し慎重であるあまり、フッサールが捉えたような『告白』の時間論の特徴を十分に捉えているとは必ずしも言い難い。

一方、ベルグランは現象学的観点を残しながらも、『告白』の時間論とセクストスの時間に関する議論との間の類似性を示すことに成功した<sup>8)</sup>。しかしなお両者の議論がいかなる関係にあるかについては議論が不十分であるように思われる。従って彼の指摘に基づき改めて両者の言説の比較検討を行い、その連続面と断絶面とについて論じることは、一定の価値を有するものであると言えよう。

## 2 アウグスティヌスの問いかけ——『告白』11巻14章17

時間論の検討にあたり、本稿ではひとまずフッサールに従い、『告白』の時間論を11巻14-28章の範囲に限定する仮設的立場を採用することにした。

同巻14章にて、アウグスティヌスは「時間とは何か」と問いかける。

それでは、時間とは何であるか。誰も私に問い尋ねるのでなければ、私は知っている。しかし、誰か問い尋ねる者に説明しようとする、私は知らないのである。しかしなお、私は確信をもって次のことを知っていると言うことが出来る。即ち、もし何ものも過ぎ去らなかつたとしたならば、過去という時間は存在しないであろうこと、また、もし何ものも到来しなかつたとしたならば、未来という時間は存在しないであろうということ、そして何ものも存在しなかつたとしたならば、現在という時間は存在しないであろうということ。しかしそれでは、かの二つの時間、即ち過去と未来とは、過去とはもはや存在せず、かつまた未来は未だ存在していないという時、いかにして存在するのであろうか。しかしまた、現在も常に現在であ

7) K. Flasch, *Was ist Zeit?: Augustinus von Hippo*, Klostermann, Frankfurt am Main, 1993.

8) Saint Augustin, *Confessions: livre XI*, note et com. Pierre Pellegrin, Nathan, Paris, 1998, p. 60ff.

って、過去に移り行かないなら、もはや時間でなくして永遠であるだろう。それ故、現在はただ過去に移り行くことそのこと故に時間であるのだから、存在しないことへと傾いている *tendere non esse* という理由でなくしては、我々は時間が存在すると真に言うことが出来ないのではないだろうか<sup>9)</sup>。

「時間とは何であるか」という問いは、それに続く文章から切り離して捉えることは出来ない。「誰も私に問い尋ねるのでなければ、私は知っている。しかし、誰か問い尋ねる者に説明しようとする、私は知らないのである」という有名な一節は示唆的である。アウグスティヌスは時間というものが、我々にとって卑近かつ自明なものであるという、一般的な了解の上にまず立った上で、それが何であるか “*quid est X?*” と問われる時、是々である “*X est Y*” と述定することが困難であり不可能なことであると主張する。

彼の問題意識はここから、時間の構成要素と思われる過去、現在、未来へと移る。彼はまず過去と未来について検討を加える。過去と未来はそれぞれ「もはや存在しない」時間、「未だ存在しない」時間として、存在しないということによって特徴づけられる。この点で、両者は存在論的に等しい地位を与えられており、事実以後の議論ではしばしば過去の語をもって、存在しない時間としての未来もが論じられている。

それに対し、現在は他の二つに対して特殊な地位を与えられる。

過去と未来とは、非存在性を自らの本質とするのに対し、現在は今まさに在るということによって特徴づけられる。時間の三つの構成要素の内、ただ現在こそが存在する時間であるということが、まず最初に立てられるのである。

しかしながら現在が有するこの「在る」という性質は限定的なものに留まる。なぜなら現在は時間である限りにおいて、常に現在で在り続けることは出来ず、過去へと移行行くからである。ここで現在は、一方ではただそののみが存在すると言われながらも、他方では常に自らの存在を失っていくものとして立てられており、「非存在へと傾いていること

---

9) *Conf.*, 11, 14, 17.

tendere non esse」をその本質とする。

さらに時間それ自体もまた、非存在から存在を通り再び非存在へと移り行くという点で、現在においてだけではなく、その全体において「非存在へと傾いていること」をその特徴として持つと言えよう。その点でアウグスティヌスは、現在と時間とを平行関係にあるものとして理解している。

それに対し永遠は、常に現在であり過去へと移り行くことがない<sup>10)</sup>。即ちこの非存在への傾きを有していないという点にその本質を置く。ここに我々は時間と対置されるものとしての永遠の概念を見る。

### 3 時間の計測の問題——『告白』11巻15章18-20

11巻14章17の議論を受け、続く15章18で彼は新たな議論を導入する。

それにも関わらず、私達は長い時間とか短い時間とか口にする。そしてそういうことを言うのは、ただ過去のものとか未来のものについてのみである。しかし存在しないところのものは、どのようにして長く、あるいは短くあることが出来るであろうか。実際、過去はもはや存在せず、未来はまだ存在しないからである<sup>11)</sup>。

前章での「時間とは何か」という問いは、ここで新たに、時間の長短をいかにして認識するのか、という問いに言い直される。我々が時間について問う時、その問いには二つの種類が存在する。即ち時間それ自体への問いと、いかにして時間を計測するかについての問いである。後者の問いは、その答えを通して、前者の問いに光をあてるが、両者は本質的に異なる類の問いであり、従ってこの問い直しには留意すべきであろう。

まずこの18節において、アウグスティヌスは過去の時間や未来の時間が長くありうるという我々の日常の語法から出発する。彼は問う。

---

10) *Ibid.*

11) *Conf.*, 11, 15, 18.

私の主よ、私の光よ、ここであなたの真理は人間をあざ笑うことだろう。一体過去の長い時間は、既に過ぎ去ったその時に長く在ったのか、それとも未だ現在であるその時に長く在ったのか？というのもそれが長く在りえたのは、長く在るだろうところのものが存在していたその時であるからである。然るに過去は既に存在しなかった。それ故、全く存在していなかったものは、長く在ることは出来なかったのである<sup>12)</sup>。

この真理の光への問いかけにより、日常の語法からは正当なもののように思える「長い時間」は自らの存立基盤を失う。というのも、「長い」「短い」と呼ばれる過去と未来という時間は、過去と未来とが共に存在しないことを自らの本質とする限りにおいて、存在しえないものであるからである。アウグスティヌスは真理の光の下で、日常的了解が突き崩される瞬間に出会う。それに対し、長く在ることが出来るのは存在しているものだけであるのだから、現前していることを自らの本質とする現在においてのみ時間は長く在り、またそれ故に計測されうるということが、仮設的結論として提示される。

さらに続く 19 節で彼は、現在という時間がある広がりとして存在しうるかを改めて問い直している。注目すべきは、呼格での *anima humana* という、人間の魂への呼びかけが同節冒頭に配されている点であろう。ここで探求の主体が人間の魂であることが明らかにされる。なぜならこの人間の魂の内こそ、時間の長短を測る能力が与えられているからである<sup>13)</sup>。

同節では、まず百年が現在でありうるかが論じられ、次に一年が、さらに一月が同様に論じられる。これによって現在の幅を一日という単位にまで縮めるのであり、そこからさらに一日もまた分割可能なことが示される<sup>14)</sup>。

12) *Ibid.*

13) “Videamus ergo, anima humana, utrum praesens tempus possit esse longum: datum enim tibi est sentire moras atque metiri.” *Conf.*, 11, 15, 19.

14) キケロは、時間の一般的定義の困難さを了解した上で、弁論術の観点から「行為 *negotium*」に関わる「属性 *attributum*」の一つとして、一定の長さに区切られた年月・昼夜という時間を扱っている (*Cicero, De Inventione*, 1, 26, 39)。

この19節での予備的議論を受け、アウグスティヌスは20節でさらに現在の広がりについての問いを押し進める。現在の時間はそれが非存在へと傾く限りにおいて一方を過去に一方を未来に譲り渡さざるをえない。いかなる広がりを持った時間も、この分割の結果、存在する現在と存在していない過去・未来とに分割されてしまう。従って真に現在と言えるのはいかなる瞬間にも分かちえない極小の瞬間であることになる。それ故、長い時間が全体として現前しているということも、過去や未来が長い時間でありえないのと同様に、ありえないことである。探究する人間の魂は、今や、ここで問われている事柄それ自体の叫びを聞く。即ち「現在の時間は自ら長くあることは出来ないと呼ぶのである」<sup>15)</sup>。

以上の15章の議論は、時間の計測に関わる二つの難問を明らかにしている。即ち(1)存在しないものは測りえず、また(2)広がりを持たないものは測りえない、という二つの問題である。

14章で明らかにされたように現在こそが存在すると言う時、我々はただ現在のみを計測しようと答えねばならない。しかしこの回答は日常的な用語法としての過去や未来に対する言明をいかに解するかという副次的な課題を残す。さらにまた現在がそれ以上分割しえない極小の瞬間であるとする時、我々は(2)の問題に直面せざるをえないのである。

#### 4 セクストス・エンペイリコスの議論

前節において我々は、アウグスティヌスが『告白』11巻15章で議論を時間の計測の問題へと移行させ、時間の三つの構成要素の内、計測されるべき時間である筈の現在を極小の分割不可能な時間へと収縮させていく中で、一種のアポリアに陥ったことを見た。

アウグスティヌスのこの議論の運びは、我々をして彼の議論をセクストスのそれと比較することを可能にする。確かに両者の年代は約2世紀離れており、またセクストスがギリシア語で著作活動を行っていたことから、当時アウグスティヌスがセクストスの著作に直接に通じていたとは考え難い<sup>16)</sup>。しかしそれでもなお、両者の議論の流れを比較検討する

15) *Conf.*, 11, 15, 20.

16) Luciano Floridi, *Sextus Empiricus: The Transmission and Recovery of Pyrrhonism*, OUP, Oxford, 2002, p. 13.

ことは有益であるように思われる。従ってまずここでセクストスの議論を簡潔に提示しておきたい。

セクストスは時間に関するストア派やプラトン、アリストテレスらの説を取り挙げた上で<sup>17)</sup>、それらの教説に対しピュロンの懐疑主義の立場から、時間が存在すると考えるのに十分な理由は存在しないということを提示しようと試みる。

ここで特に注目したいのが時間の三つの構成要素を巡る彼の議論である<sup>18)</sup>。

彼はまず、時間を構成する三つの要素について次のように言う。

時間は過去、現在、未来という三つの部分に分かたれると言われる。それら部分の中で過去と未来は存在しない。事実もし仮に過去の時間と未来の時間とが今存在するとしたならば、それらの各々は現在ということになろう<sup>19)</sup>。

ここでセクストスもまた、過去と未来とを共に「存在しないもの」として措定している。しかし、現在の地位を巡る彼の議論は『告白』のそれとは異なった結末を迎える。なぜなら、彼は現在が分割可能なものでもなければ分割不可能なものでもないということを論じることによって、

17) *Bibliotheca Teubneriana, Sexti Empirici Opera, v. I, Pyrrhoniae hypotyposes* recensuit Hermannus Mutschmann, Teubner, Leipzig, 1912, 3, 19, 136-138.

18) Sextus, *Pyrrhoniae* .... 3, 19, 144-146. この箇所の議論は、ストア派の時間とは「何か τὸ τι」であるという説を念頭に置いたものであるように思われる。周知のようにストア派は存在するものは全て物体であると説き、時間は非物体的なものとして、存在する *ὑπάρχειν* ののではないが成立する *ὑφίστασθαι* と主張した (Sextus, *Adv. Math.*, 10, 127-128 = J. von Arnim ed., *Stoicorum Veterum Fragmenta* (t. 3, Lipsiae, 1903-5), 2, 331)。しかしセクストスは、存在と成立とに関わるストア派特有のこの区別を、少なくともこの時間の問題に関しては考慮に入れていないと考えるべきであろう。実際クリュシッポスは過去と未来は存在しないが成立していると言いたが (Stobaeus, *Eclogae*, 1, 8-41 (106) = S. V. F., 2, 509), その点に対するセクストスの言及は本箇所に見られず、「時間は何かであるのではない」というセクストスの結論は「存在しないものから構成されるものは存在しないものである」という理由に基づく (本稿註 22)。恐らくこれはストア派の重要な公理である、何であれ存在するのは物体である、という命題をセクストスが共有していないであろう。アウグスティヌスもこのストア派の公理を探らないのであり、存在と成立に関わるストア的区別を本稿では導入していない。

19) Sextus, *Pyrrhoniae* .... 3, 19, 144.



現在が存在するということがそれ自体に疑義を投げかけるからである。彼の主張を要約すると以下のようなだろう。

まず現在は分割可能なものであるように思われる。というのも「変化するのは現在という時間において変化すると言われるが、しかしかなるものも分割されえない時間においては変化しない」からである。従って「現在という時間は分割不可能なものではない」との結論が導かれる<sup>20)</sup>。

しかし、時間が分割可能であるということは矛盾をきたすように思われる。なぜなら現在という時間を分割することは次の問題を生じさせるからである。即ち、現在という時間は過去という時間へと移行行くものであると言われているのだから、もし現在が分割されうるとすると、現在の内のある部分は既に過去へと変化しているはずである。然るに現在が存在している筈であるのに対し、過去はもはや存在していないのであるから、現在のある部分は存在しており、ある部分は存在していないということが帰結する。しかしこれは不合理である。未来についてもまた同様に。従って現在は分割不可能であると結論づけなければならない<sup>21)</sup>。

従ってセクストスによれば、我々は現在が分割可能であると同時に分割不可能であると主張せねばならず、それ故にそれが存在していないと看做さなければならないのである。今や存在するかに思われた現在もまたその特権的地位を剥奪され、未来や過去と同様に存在しないものとして立てられることになるのであり、三つの構成要素の全てが存在しない以上、時間が存在するということがまた疑わしいものとなるのである<sup>22)</sup>。

## 5 セクストス・エンペイリコスの議論との類似と相違

以上のセクストスの議論は次の四つの段階から成る。即ち、(A) 現在こそが存在するという仮設的前提を立てる段階、(B) 事物の運動変化が時間の内で生じるが故に現在の分割可能性を認める段階、(C) 過去と未来の非存在性から現在の非分割性が導出される段階、(D) B, Cの議論を基に、現在が存在するという仮定が退けられ全ての構成要素が

20) *Ibid.*, 144-145.

21) *Ibid.*, 145-146.

22) *Ibid.*, 146. Cf. *idem, Adv. Math.*, 6, 63; 66-67.

存在しないが故に時間の存在が否定される段階の四つである。

『告白』11 卷 14-15 章の議論の構成は、このセクストスの議論と外形上重なり合うように思われる。

まず 14 章においてアウグスティヌスは、ペルグランが強調するように<sup>23)</sup>、(A') この懷疑主義者と同様の「現在こそが存在している」という前提から出発する。そして続く 15 章で時間の計測の問題が取り上げられるが、(B') 時間を計測する能力を魂の内に認めるアウグスティヌスの議論は、その本質において、現在の内に一定の広がり認めようとするものであると言える。というのも、時間の三つの構成要素の内、存在するものはただ現在のみであるという時、時間の計測という事態は、存在する現在という時間の内に一定の広がり認められることによって初めて可能になるからである。しかしまた先に見たように一方で彼は、セクストスと同様の論法を以って (C') 現在の分割不可能性を導出するのである。

従って、アウグスティヌスの内にも (A)-(C) と同様の議論の推移が認められる。彼もまたセクストスと同様に、現在の分割可能性と分割不可能性という二つの相矛盾する位相を認めるのである。しかし彼は (D) の結論に至ることを回避する為に 16 章以下で特徴的な議論を展開する。従って以下その議論を追うことにしたい。

但し次の考察に入る前に、アウグスティヌスとセクストスとの間の次の相違点に言及しておく必要があるだろう。即ち、後者が時間の内に生じる事物の運動変化 *μεταβάλλειν* の観点から現在の分割可能性を論じているのに対し、前者は時間の計測という我々の行為によってそれを提示している点である。この相違がいかなる意味を持つかについては、『告白』11 卷 16 章以下の議論を見らる中で明らかとなろう。

## 6 三つの現在

『告白』の中でアウグスティヌスは時間を、本質的に、常に「非存在へと傾いている」ものとして捉えるのであり、このような性質から、時間は「過ぎ去り行く時間 *tempus praeteriens*」とも呼ばれる<sup>24)</sup>。この時、

23) P. Pellegrin, *op. cit.*, pp. 61-62.

現在は分割不可能な極小の瞬間でなければならない。そして時間が持つまさにこの特性から、時間の計測という我々にとっての日常的な経験的事実が問題となる。

『告白』11巻16章21において、アウグスティヌスは、時間の計測という事態が有する不思議を再び定式化する。即ち「存在しないものを測ることが出来るとあえて主張せねばならない者を除いて、既に存在しない過去と未だ存在しない未来とを一体誰が測ることが出来るだろうか」と問うのである<sup>25)</sup>。この問題に対する彼の基本的な態度は明瞭である。存在しないものは「知覚されることも測られることも出来ない<sup>26)</sup>」のであり、「見られることもない<sup>27)</sup>」。ここでは過去と未来という、二つの存在しない時間が問題にされる。この問題に対する唯一の可能な回答は、過去と未来とを、それこそが存在している時間である現在の内へと位置づけることであろう。同巻20章26で彼は次のように言う。

さて今や次のことは明瞭である。即ち未来も過去も存在せず、また過去、現在、未来という三つの時間が存在すると言うことも適切ではないのであって、むしろ、三つの時間、即ち諸々の過去についての現在、諸々の現在についての現在、諸々の未来についての現在が存在するという方が恐らく適切であろう。実際、これらのものは魂 *anima* の内にいわば三つのものとして存在し、魂以外に私はそれらのものを認めないのである。即ち過去のもの現在の現在は記憶であり、現在のもの現在の現在は注視であり<sup>28)</sup>、未来のもの現在の現在は期待である。もしもこのように言うことが許されるなら、私もまた三つの時間を認めて、三つの時間が存在すると認めよう<sup>29)</sup>。

24) “ex illo ergo, quod nondum est, per illud, quod spatio caret, in illud, quod iam non est [ tempus praeterit].” *Conf.*, 11, 21, 27.

25) *Conf.*, 11, 16, 21.

26) *Ibid.*

27) *Conf.*, 11, 17, 22.

28) アウグスティヌスはこの *contuitus* の語を *intentio* と言い換えており (*Conf.*, 11, 27, 36), その動詞形として *attendere* の語が用いられる (*Conf.*, 11, 28, 37)。Cf. J. J. O'Donnell, *op. cit.*, pp. 234-235.

29) *Conf.*, 11, 20, 26.

ここで彼は三つの時間を現在の内へと位置づける。但しそれは、魂の内にある「記憶 *memoria*」と「注視 *contuitus*」と「期待 *expectatio*」という三つの現在である。この三つの現在という概念装置を用い、彼は過去、現在、未来の三者に等しい存在論上の地位を付与すると共に、それらが存在する場として魂を置く。

注意すべきは議論がここで、存在者の外から内へと移行している点である。魂の内の三つの現在は時に応じて、存在者の前に立ち現れてくるものであり<sup>30)</sup>、我々と無関係に外的世界の内に存在しているものではない。この点については、広がりを持たないものは測りえないという難問に対するアウグスティヌスの回答を見る中でより明らかになることだろう。

## 7 魂の広がり

今や過去、現在、未来という三つの時間は、魂の内に三つの現在として、自らの存在を確保する。これら三つの現在はまた、記憶と注視と期待であると言われた。三つの現在の議論は過去と未来とに存在の場を与えるが、他方我々が計測するのはある一定の広がりであるという問いに答えるものではない。従って更なる議論が要請される。

まずアウグスティヌスは、期待と注視と記憶という三つの現在を、「期待し *expectare*、注視し *adtendere*、記憶する *meminisse*」という魂の三つの働きとして言い換える<sup>31)</sup>。そしてこの魂の働きとしての注視こそが、測られるべき時間の広がりを形づくる。

アウグスティヌスによれば我々が計測するのは「ある発端から終わりまでの間隔」に他ならない。彼は、ある一連の音の響きを例にとる。ある音が響き始め、響き続き、今止むとする。その音は響く以前にも、鳴り響き終わった後にも、存在しないが故に測ることは出来ない。従って響いていたその時にこそ測られることが出来たのであるが、その時音は「留まっておらず」「過ぎ去りつつあった」<sup>32)</sup>。

30) 過去は記憶によって未来は期待によって、今まさに存在者の前に現れる (*Conf.* 11, 18, 23-24)。またそれ故、時間は物体の動でもない (*Conf.* 11, 24, 32)。

31) *Conf.* 11, 28, 37.

32) *Conf.* 11, 27, 34.

そして音は過ぎ去りつつあるまさにその時に、印象 *affectio* として魂の内に刻まれる。

私の魂よ、私はお前の内で時間を測る。……過ぎ去って行くものがお前の内に形づくり、それらが過ぎ去ってしまった後も留まっているこの現前している印象 *affectio* を私は測るのであり、〔この印象を〕形づくる過ぎ去ってしまったものを測るのではない。時間を測る時、私はこの印象を測っているのである<sup>33)</sup>。

この引用から理解されるように、我々が計測するものは現に過ぎ去り行く音それ自体ではなく、音が魂の内に形づくる印象である。彼は過ぎ去り行く時間と計測される時間とを異なるものとして立てるのである。

このような印象の形成を可能ならしめるのは現在の注視作用 *intentio* であり<sup>34)</sup>、アウグスティヌスは期待されたものが、現在における魂の作用であるところの注視を通して、記憶へと移されると述べる<sup>35)</sup>。注視は過ぎ去って行くものが過ぎ去って行く間「持続する *perdurare*」のであり<sup>36)</sup>、その結果一続きの印象が、我々の前に現前するものとして、記憶されることになる。ここで重要なのは、彼が分割不可能である過ぎ去り行く時間の現在に対し、注視の特徴を持続という点に求めていることである。

時間は、対象へと注視作用が向けられている任意の期間に従って、ある一つの連続した延長、即ち魂の広がり *distentio animi* として、魂の内で計測可能な広がりを獲得する。従って我々は、確かに存在するものを計測するのであり、かつまた過ぎ去り行く時間の内の広がりを持たぬ現在をではなく、持続する注視作用の故に、各存在者の内において広がりとして存在する一つの現在、印象としての現在を計測するのである<sup>37)</sup>。

33) *Conf.*, 11, 27, 36.

34) "... dum praesens intentio futurum in praeteritum traicit deminutione futuri crescente praeterito ..." *Ibid.*

35) "nam et expectat et attendit et meminit, ut id quod expectat per id quod attendit transeat in id quod meminerit." *Conf.*, 11, 28, 37.

36) *Ibid.*

37) 片柳は、時間の持続性の中で注視作用の持続により魂の広がり形成されるこの

それ故、アウグスティヌスにとりこの持続の概念は二重の構造の内に捉えられる。注視作用が継続するのは、その音がまさに経時的に継起し「過ぎ去りつつあるが故に」他ならない<sup>38)</sup>。時間の持続性が、注視作用の持続性を担保する。そして一方で記憶へと刻まれる印象は、対象へと注視のまなざしが向けられている *adtendere* 間、現在から過去へと広がって *distendere* いくのである。この二重の持続性の故に、魂の注視作用はあるものの発端から終わり迄を一続きの広がりとして記憶の内に保存するのである。

## 8 結 論

以上の考察から、我々は今や次のように言うことが出来るように思われる。

セクストスは現在の分割不可能性と分割可能性とが相矛盾するが故に、時間存在そのものの基盤が疑わしくなると説いた。アウグスティヌスは彼に先立つ懐疑主義者の提示したこの難問を自己の課題として引き受けているように思われる。先述したように、セクストスからの直接的影響は認め難いが、一方で当時巷間に流布していた教説の一つとして彼がこうした議論を知り得たという可能性は否定しえないだろう。

ペルグランは『告白』の時間論をして、セクストスの合理的議論に対しアウグスティヌスが我々は時間を現に計測しているという日常的確信を持ち出すことにより反論を試みるとし、両者の間には「耐え難い対立」が存在すると指摘している<sup>39)</sup>。この指摘はある意味で正しい。なぜならアウグスティヌスは、時間の計測という「日常的」な我々の行為の内に時間を巡る問いそれ自体の場面を移し替えることで、難問の解決を図るからである。

セクストスにとって時間の分割不可能性が問題となるのは、事物の運動変化との関係からであった。それに対し、アウグスティヌスが『告

---

過程を、「過ぎ去りつつある直中において時間を測る」ことであるとしている（片柳「アウグスティヌスの時間論の形而上学的背景についての一考察」『中世思想研究』45, 2003, 25頁）。

38) *Conf.* 11, 27, 34.

39) P. Pellegrin, *op. cit.*, p. 61.

白』の中で問題にするのは、時間の計測という現象それ自体が持つ謎である。彼は『告白』11巻14章で時間を過ぎ去り行くものとして規定した後、15章で問いを時間の計測の問題へと限定するが、ここでは事物の運動変化は既に前提されており、問題は我々がそれをいかに認識するかという点にある。

この時間の計測の謎において問題となるのは、(1) 存在しないものは測りえず、また(2) 広がりを持たないものは測りえない、という点であった。というのも、「過ぎ去り行く時間 *tempus praeteriens*」の中では、時間の三つの構成要素の内、ただ現在だけしか存在することを許されず、その現在もいかなる広がりをも有しえないとされるからである。それに対し彼は(1) 三つの現在という概念装置を用いて計測されうるものが存在しうる場を確保すると共に、(2) 魂の広がりという概念装置によって計測されうる広がりを自らの魂の内に見出すのである。今や期待と注視と記憶という魂の三つの働きが明らかにされ、とりわけその注視の働きの内に時間の計測を可能ならしめる本質的な役割が定め置かれる<sup>40)</sup>。

このように、アウグスティヌスは『告白』11巻のいわゆる「時間論」において、既に存在する議論の骨子を恐らくは援用しつつも、その問題の領域を時間の計測という人間の行為の場面へと限定することによって、議論を認識論的問題へと還元するのであり、ここに彼の議論の最大の特徴がある。そして、その意味でアウグスティヌスの時間論は、現象学的研究がそれを示しているように、時間を「内的」な次元から捉えようとする試みであると言えよう。

しかしまた、そこで描かれているのは、「魂の内」に据えられた三つの働きであった。この点で彼の議論は、近代的なあるいはフッサールの内的意識を巡る問題系の内ではなく、ギリシア以来の魂を巡る問題系の内に位置づけられていると言えよう。時間の計測を巡るアウグステ

40) 前節で見たように、時間の場合は究極的には記憶の内に入れられる。その意味ではカイザーの言うように、記憶、注視、期待の中で記憶の首位性が認められると言えよう(カイザー、上掲書、47-48頁)。しかしベルグランの指摘するように、時間はまさに現在においてのみ測られるのであって、「過去と未来との交流を可能ならしめる注意作用として叙述される精神の現在の活動」こそいかにして時間を計測するかという問いに対する最終的解答である(P. Pellegrin, *op. cit.*, p. 74)。

イヌスの議論が『告白』の中でいかなる意義を有しているかを明らかにする為には、この歴史的な脈を踏まえた上で、注視作用による印象形成の過程を改めて考察する必要があるように思われる。しかしこの点については、別途稿を改めて論じることにはしたい。